



## 慶應義塾大学ビジネス・スクール

# うつ病を抱えながら勤務している男性

主訴：20数年来、対人恐怖とうつ病（抑うつ症状）を抱えながら勤務している。治療的には精神科の外来に20年来通っており、人事的には配置転換、休職、などで対応しているが 10 症状が改善しない。本人の悩みも深いし、会社としても処遇に窮している。

これまでの経緯：42歳の男性、独身。工学系大学院の修士課程修了。28歳で自動車関係の製造メーカーにエンジニアとして就職。初めは技術者として開発の仕事を行っていた。対人関係を結ぶのが苦手で、仕事上の折衝や、仲間と飲みに行くことが大変苦痛である。言葉少なで会議や打ち合わせの席などではいつも下を向いて黙っている。意見を求められれば小声で話すが、自分からは積極的に話さない。初めの職場はエンジニアの「変わった人」が多くて目立たず、そこそこに仕事をしていた。上司や同僚に理解してくれる人がいて、のんびりした職場で2年ほどはまづまづ勤務していた。3年目になって上司が代わって、生産性の追求が厳しくなり、職場にピリピリした雰囲気が漂い始めた。上司から「はっきり 20 話せ。やる気があるのか」と叱責されるようになってから、ますます自分の中に籠るようになり、ほとんど口が聞けなくなった。ある日上司に勤務態度（人と打ち解けない。元気がない。ものを言わない）のことで注意されたのをきっかけに、職場に出てこなくなった。2、3日経って同僚が心配して独身寮を訪ねてみると、ドアに鍵をかけて籠っているのが分かった。ドアを合鍵で開けて入ってゆくと布団にくるまってじっとしていた。同僚が出勤 25 を促すと、アイスピックを振り上げて嬌声をあげて飛びかかってきた。人事部がこの事件を聞きつけて、故郷の親元から通勤できる事業所に配置転換をした。

故郷の事業所でも5年ほど開発の仕事をしていたが、抑うつ傾向は続き、病院通いをしながら勤務していた。あまりに辛そうなのを見かねて、この事業所の教育担当の課長（元エンジニアで、うつ病を患って今は教育の仕事をしている）が、自分が面倒を見るからと引き受けてくれた。2人で教育のスケジュール作ったり、講師のアレンジなどの仕事を7年ほどやった。この時はうつ傾向は弱くなり、よく職場に適応していた。教育担当に新たに係

---

このケースは慶應義塾大学ビジネス・スクールの渡辺直登教授が作成した。ケースに記載されている個人情報については、本人および関係者の尊厳と秘密を保護するため、当事者の了解のもと事実から逸脱しない程度に偽装されている。

長が入ってきた。この係長はいわゆる会社の「困った人」で、歯に衣着せぬもの言いの上、自己中心・自信家で、どこも引き取り手がなくて教育担当になった人である。係長から事あるごとに「とろいことしとんでもやあって。たわけたことぬかすでねえよ。きゃーしゃ（会社）はもうけにやあかんでもよ」などの言葉を大声で浴びせられるようになってから、うつがひどくなり、会社を休みがちになった。課長が間に入ってとりなしてくれたが、頭重感、もやもや感、睡眠障害、集中力低下、がつのり、休日は寝てばかり、出社もままならぬ状態になった。精神科医が休職を勧め、休職することとなった。1年11ヵ月休職して、復帰後は法律文書関係の仕事をしている。うつ病の症状を抱えながら、現在も勤務中。事業所の業績が落ち込み、リストラも考えざるを得ない状況となっていて、本人は不安感を、人事は処遇の難しさを覚えている。

5

10

**病歴**：高校2年の時から対人関係に困難を覚えるようになり、引きこもりがちに。人が恐くて震えていた。高校3年のとき学校に行けなくなって精神神経科受診。対人恐怖と精神病の境界線との診断。以降、精神科で投薬とカウンセリングによる治療を20数年間受けている。対人恐怖と抑うつで、大学で2年、大学院で2年留年している。

15

---

不許複製

---

慶應義塾大学ビジネス・スクール

Contents Works Inc.